

Title	伝統をめぐる戦略的表現 : インドの女神儀礼用染布を事例に
Author(s)	上羽, 陽子
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 132-133
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53534
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

伝統をめぐる戦略的表現

— インドの女神儀礼用染色布を事例に —

上羽陽子／国立民族学博物館

本発表で取り上げた女神儀礼用染色布・マターニーパチェーディは、インド西部、グジャラート州アムダバード県ワサナ地区において、ワグリ（チッタラ）の人びとによって製作されている。本発表の目的は、女神儀礼用染色布の製作技術に焦点をあて、つくり手たちが「伝統」をどのように主張しながら、戦略的に製作をおこなっているかについて明らかにすることにある。

女神儀礼用染色布・マターニーパチェーディは、ヒンドゥー教の女神を題材に絵語りの要素をもち、「マターニー」は「女神の」、「パチェーディ」は「後ろ」という意味を持っている。グジャラート州に居住する一部のヒンドゥー教徒のあいだで、女神儀礼の祭礼時に、この染色布が天蓋や掛け布として、聖なる空間を仕切る役割として用いられている。一方、女神儀礼用染色布は、観賞用として工房を訪れる観光客や、インド国内外の土産物屋、ギャラリーなどでも販売されている。

染色布の製作者であるワグリの人びとは、グジャラート州では狩猟を生業としていたといわれ、今日では古着・刺繍布販売、行商などさまざまな職業に就いている。女神儀礼用染色布を製作しているワグリの人びとは、自らをチッタラ（＝画家）と呼んでいる。

現在の製作技術は大きく二つに分けることができる。一つは、カラムと呼ばれる竹ペンによる手描き線画と化学染料アリザリンを用いた浸染め技術。もう一つは、手描き、木版、シルクスクリーンを併用した線画と短時間で染色可能な化学染料（ラピッド染料）による捺染め技術である。前者は主に鑑賞用、後者

は地元のマーケットで販売され、地元の人びとによって儀礼時に用いられている。

儀礼時に用いる女神儀礼用染色布を新たに購入する場合、購入者は製作者へ事前に注文をする。完成すると、女神儀礼の司祭者と氏族の代表格の複数人で、染色布のできあがりを確認するために製作地を訪れる。購入が決まると、製作者が女神の名前をグジャラート文字でアクリル系顔料によって記入し、受け渡しとなる。

この受け渡しの中で、注目すべき点がある。購入者は、女神儀礼用染色布の素材や製作技術に関心はなく、自らが信仰する女神がどのように描かれているのかといった点にこだわりを持っているということである。製作者は、携帯電話を通じて、注文主から1枚の布に対して、どのような順番で女神を描くかといったことを聞き取り、それを元に染色布を製作する。完成した染色布を見て、注文主は女神の手の向きや持ち物などに異議をつけて、その場で描き直しを命じることが多々ある。製作者はその場で、アクリル系顔料を用いて修正を加える。

一方、観賞用として製作されている女神儀礼用染色布の購入者は、手描きや天然染料であることを望み、いかに緻密な線画によって描かれているかといった点に関心を持っていることが多い。製作地を訪れるインド国内外の観光客と製作者とのやりとりを観察していると、製作者は、「カラム」「ナチュラル」「ベジタブル」「トラディショナル」といった言葉を繰り返し述べながら、自らの染色布を売り込むのである。

こうした中で、筆者が常々疑問に思っていることの一つが、化学染料アリザリンによる染色技術を、製作者が「ナチュラル・ベジタブル」と呼んでいることである。

天然染料の中で、赤色系の堅牢なものはアントラキノン誘導体を有し、ムツバアカネ、ラックダイ、コチニールなどが挙げられる。古来よりインドでは、ムツバアカネ（茜草科 *Rubia tinctorum* L.）の根を染材として使用し、その主成分はアリザリンである。その後、1868年に合成化が成功すると、ムツバアカネによる染色は衰退し、化学染料アリザリンによる染色が広くおこなわれるようになっていった。現在の製作現場においても化学染料アリザリンが使用されている。つまり天然＝「ナチュラル・ベジタブル」と捉えるのであれば、現在の染色技術は化学＝「ケミカル」であるために、彼ら自身による染布の製作技術の解説において、「ナチュラル・ベジタブル」を多用することは矛盾している。観賞用の染布には、下浸剤としてミロバラン（シンシク科 *Terminalia chebula* RETZ.）の果肉や、助剤としてダヴァリ（ミソハギ科 *Woodfordia floribunda*）と呼ばれる小灌木の花など天然素材を多用している。また、化学染料アリザリンの成分は、天然のものと同等である。これらを起因として製作者は、「ナチュラル」と語っているのだろうか。しかし、筆者が化学染料アリザリンを指して、「これはケミカルか」と尋ねると、製作者は「そうだ」と答えることから、製作者自身は、「ケミカル」として認識しているのである。

なぜ、かれらはありのままの製作技術を伝えないのであろうか。そこには、購入者が思い描く伝統的技術＝天然染料といった幻想がともなっているからと推察できる。これは、ローカルな購入者へは、「ナチュラル」「ベジタブル」「トラディショナル」といった言

葉が発せられないことから明らかである。

また、化学染料アリザリンによる染色は、現在の製作者の祖父の代からはすでにおこなわれていたという。そのため、古くからの伝承技術という文脈において「トラディショナル」という言葉を用い、「ナチュラル」「ベジタブル」という言葉においても、天然と化学といった対義語として使用しているのではなく、「トラディショナル」という文脈の領域内に入れ込み、製作者が巧みに自らの技術を戦略的に語っていると考えられる。



チッタラによる女神儀礼用布の製作風景